戦後70年 ― 新富町の戦争遺跡

日本最初の落下傘部隊が移駐 ― その後、南方方面作戦基地に
新田原陸軍飛行場

現在の航空自衛隊新田原基地がある場所には、昭和22年に農林省から開拓農地として払い下げられるまで、新田原陸軍飛行場がありました。飛行場建設の決定は昭和13年。土地には、農地・民家のほか、昭和産業株式会社所有の農地や社宅もあり、農地の買い上げ及び代替地の確保、文化財の保護、飛行場建設に伴う労働力の確保等多くの問題がありました。それを一つ一つ解決しながら飛行場は完成し、昭和15年に使用開始されました。

昭和16年9月には日本初の落下傘部隊である陸軍挺進練習部（一〇六部隊）が移駐し（※）、12月の真珠湾攻撃、昭和17年2月の落下傘部隊によるパレンバン作戦参加を経て、新田原陸軍飛行場は、日本陸軍の南方進攻の訓練基地・航空輸送基地として重要拠点となっていきます。

また、敗戦の色が濃くなった頃には、陸軍特攻隊の経由地あるいは直接出撃基地としての役割も果たしました。

（※）一〇六部隊の降下訓練は、川南村（当時）の唐瀬原一帯で行われました。

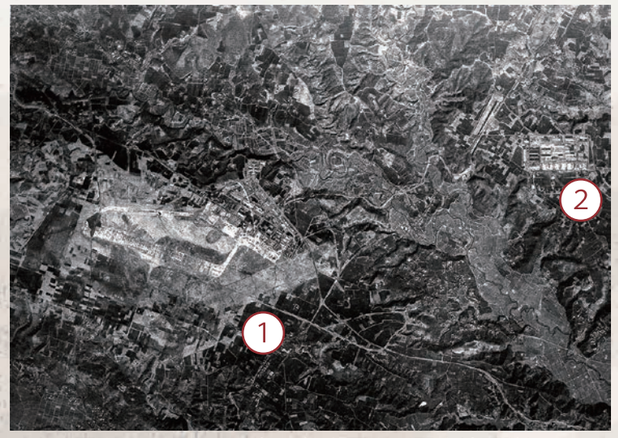

写真１　昭和２２年の航空写真（国土地理院）

西部一〇一部隊跡と陸軍航空通信学校新田原教育隊跡

写真１は、昭和22年に撮影された航空写真で、新田原陸軍飛行場（①）の右側（②）にあるのが、昭和16年2月に移駐してきた第九航空教育隊（西部一〇一部隊）並びに陸軍航空通信学校新田原教育隊（※）です。

（※）西部一〇一部隊が移動後に設置されました。

現在は、写真２のとおり、西部一〇一部隊の記念碑（昭和54年建立）と、当時の学校の門柱を利用した教育隊の記念碑（昭和53年建立）があります。

西部一〇一部隊の記念碑には、「此処ニ西部一〇一部隊ノ鎮魂ノ碑を建テ英霊ヲ慰メ後世ニソノ足跡ノ一端ヲ遺シ恒久ノ平和ノ定礎トナルヲ記シ建立ス」と記されています。

写真２　２つの記念碑（大字三納代北原牧）

掩体壕（えんたいごう）

装備や物資、人員などを敵の攻撃から守るための施設である掩体壕が、基地の南側の農地の中に4基残っています。

掩体壕は、少ない資材で十分な強度が得られるようにコンクリートで作られており、半地下式のようになっていました。

写真３　農地の中にぽっかりと存在する掩体壕

航空自衛隊新田原基地
空挺歌碑と航空参考館

昭和33年、新田原陸軍飛行場とほぼ同じ場所に航空自衛隊新田原基地の滑走路が完成しました。その後、同年4月にT-33Aの初飛行があり、新田原基地は本格始動します。現在基地にある第五航空団が松島から移動して来たのは、昭和36年のことです。

基地内には、「空の神兵」と称えられた陸軍空挺部隊顕彰歌碑（昭和43年建立）があり、祖国のために若い命を捧げることを覚悟した兵が遺した歌が刻まれています。空挺部隊の活躍や武勲と同時に、当時の悲惨さや苛烈さも伝わってくるようです。

また、航空参考館には旧陸軍時代の資料も保存されています。当時、陸軍が身に着けたものや記録等の貴重な資料を見ることができます。（見学には、新田原基地への申込みが必要です。）

写真４　空挺歌碑（上）と航空参考館内部（下）

改葬された古墳
石舟塚

新田原陸軍飛行場の建設地には、新田原古墳群の墳墓があり、その取扱いが国と県、新田村（当時）で議論されました。結果、発掘調査終了後、石舟塚を含む4基の墳墓は、実物の5分の1の塚となって、出土した遺物とともに大師山公園に改葬されました。発掘当時、古墳の横に露出していた巨石の一部は、新田学園に現存します。

写真５　大師山にある墳墓

写真６　新田学園に保存された巨石

空襲から人々を守った
防空壕

真珠湾攻撃から約3年後の昭和20年3月、宮崎県に初めて米軍機が来襲し、それを皮切りに富田村・新田村とも、連日のように空襲の被害を受けました。その度に地区の催事が中止となり、学校への出校が停止になったようです。

空襲から逃れるための防空壕は、今も町の至る所に残っており、平成17年の調査では、96箇所の防空壕と131箇所の入口が確認されています。現在は入口が塞がれ入ることはできませんが、当時の様子を残す防空壕もありました。

写真７　唐ヶ山公園の防空壕

参考資料：新富町史（通史編）、宮崎県史（通史編　近・現代２）、新田原基地航空参考館